広州日本人学校における国際教育の実践と今後の可能性

前広州日本人学校　教諭
福島県会津若松市立城西小学校　教諭　目　黒　洋　光

キーワード：国際教育、現地校との交流・体験、異文化理解、コミュニケーション能力

１．中国・広州市と広州日本人学校の概要

中国・広州市は中国でも経済、文化、教育、交通などが発達した華南地方最大の都市であり、国務院により国家中心都市の１つに指定されている。また特別行政区の香港やマカオに隣接しており多くの文化や人々、貿易の交流が行われている。2015年時点での人口は約1270万人に達し、地下鉄、高速道路などの交通網が発達している。また、近年日本の自動車企業や大手スーパー、コンビニなどの企業も数多く進出しており、まさに中国近代都市の象徴と言える。

一方で広州日本人学校に目を向けると、平成27年度で創立20周年目を迎えており、小学校と中学校が同じ校舎にある小中一貫校である。児童生徒数は約400名おり、体育館、屋内プール、人工芝の校庭、全教室の空調完備など、教育環境としての施設・設備は十分な状態であると言える。教育内容に目を向けると中国語教育を日常的に行い、英語教育も小学校低学年から取り入れ、世界で対応できる児童生徒を育成することを目指している。また、小中一貫校としての特色を活かすため、中学部所属の教諭が小学部高学年の授業を実施しており（一部教科担任制の導入）、このことにより教師の専門性を活かした質の高い学習指導を行うことで、より一層の学力向上を図ることを目的としている。日本と同等の教育環境・教育施設の中で充実した教育カリキュラムが展開されている状況である。

２．研究の方向性

本校では、児童生徒が中国の異文化を直接肌で感じながら、この地でしかできない国際教育を推進する絶好の機会と考えており、校内研究においても、【共生の資質を育む教育活動の創造】を研究主題に〔国際教育の視点に立った授業づくりを通して〕を研究の重点として全教師が研究授業を公開し研鑽（けんさん）に励んできた経緯がある。授業では現地素材の教材化を図り、体験活動や交流学習を活かした異文化理解の研究を進めてきた。本稿では筆者が実践してきた国際教育に関わる取り組みの成果と課題について述べ、今後の在外教育施設での国際教育の可能性について考察したい。

３．研究の内容と方法

(1) 研究の内容

①中国現地校との交流学習の計画・立案・実施・評価

広州市の現地校の東風東路小学との交流学習の計画を立案する。交流の内容を明確にし、子どもたちが自他の文化を尊重し合うことのできるものを仕組む。（日本・中国文化の紹介、日本の伝統的な遊びによる交流等）

②マカオ・西安修学旅行の計画・立案・実施・評価

平成25年度は広州とマカオ（中国特別行政区旧ポルトガル）、平成26年度は広州と西安との比較・検討という視点を持って修学旅行にのぞませていく。事前の学習において、歴史・文化というテーマにそって広州とマカオ、西安との共通点・相違点を意識させながら進めていく。本番の修学旅行では、実際の物作りの体験や目で実際に見たマカオ、西安の歴史・文化について情報を整理させ、事後学習ではそれらをまとめさせていくようにする。

(2) 実施方法

上記訪問計画のもと、体験活動を行う。実際の体験活動・授業研究の分析等や児童のアンケート結果を参考に

交流の成果や課題を明らかにしていく。

(3) 実践の概要

①中国現地校（東風東路小学）との交流学習

ア．概要の説明

本校ではここ数年間にわたり、現地校である東風東路小学との交流学習を行っている（小学部のみ。なお中学部は現地のカレン大学との交流学習を行っている）。年間 2 回設定されており、6 月は日本人学校での交流、12 月は現地校での交流とお互いの学校を訪問しあう形をとっている。（平成 24 年度は中国の反日デモの影響で中止となった経緯もある。）

6 月の日本人学校での交流会は、小学部の全校生が体育館に集まり、現地校の児童と一緒に顔合わせを行う。国際交流委員会の児童が司会を務め、交流会の内容説明等を中国語で行った。本校には中国語の通訳として事務スタッフが在籍している。その通訳をもとに校長先生の挨拶も現地校の児童に丁寧に説明していく。互いの交流を和やかに進めるために、東風東路小学の校歌を互いの児童が歌うという時間も設定されている。なお、現地校の校歌については音楽部が主体となって月の歌に設定され、4 月から学級等で練習を進めている。なお、開会式後は各学年に別れ、それぞれの交流を行っていく。その内容は、日本の伝統の遊び（カルタ、折り紙、踊り）や運動会で披露した表現運動を現地校の児童と一緒に行うなどの体験的な交流が中心となっている。

イ．6 年生の交流学習

〈6 月：広州日本人学校にて〉

1つ目の交流として、福笑いを行った。グループごとに互いに中国語で自己紹介をすることからはじまり、その後福笑いの活動に入った。本校児童が福笑いの説明を、授業で学んだ中国語（場合によっては英語。英語で会話できる現地校の児童が多い。比較的裕福で教育力がある学校なのが現状）やジェスチャーを交えて行った。コミュニケーションは言葉だけではないことを痛感した。昨年度も同じような感想をもったが、身振り手振りを交えて自分が伝えたいことを一生懸命伝えようとする気持ちで相手はわかってくれる、そんな瞬間があった。活動は和やかに進み、現地校の児童は日本の文化のよさやおもしろさを実感したと思う。また、場所を変えてカルタゲームを行った。この活動も互いがコミュニケーションをとりながら楽しく活動を進めることができた。本校の 6 年生の感想から「福笑いをとおしてお互いが笑いながら楽しく活動できた」「相手に気持ちを伝えることの大切さを感じた」「最初はドキドキして緊張した。でも徐々に今しっている中国語を使って会話をしていくと、その緊張がなくなった。また交流をしたい」という意見が聞かれた。なお、他の学年でも同じように日本文化の交流、互いの体験活動を通しての交流を進めることができた。

福笑いで楽しく交流する

〈12 月：東風東路小学にて〉

現地校での交流も行った。中国でよく使われている折り紙の体験活動を行った。企画・運営はすべて現地校の先生によるものである。なお交流時における言葉の壁を少しでもなくすために、民間の日本語通訳者を確保した。日本でもおなじみの鶴を一緒に作成する時間があった。ここで日本の文化と中国文化の共通点を知るきっかけとなった。鶴の作成では、折り方に苦労する児童が多く、互いの出来具合を一緒に確かめながら活動する姿が見られた。次に、中国の昔遊びを体験した。日本の竹の棒を使って一定のリズムを刻みながら、その竹の間や外側をまたいでいく遊びになる。現地校の児童の見本を十分に見せてもらってから、実際に自分たちが活動を行っていくようにした。最初は不慣れな部分があったが、練習を重ねるうちに上手になり、様々なリ

ズム変化にあわせた遊びができるようになってきた。最後は、現地校の児童が竹の操作を行い、日本人学校の児童がそれにあわせて行うといった共同で遊び場面が見られ、互いの児童が充実感にあふれた表情であった。

②平成25年度　小6マカオ修学旅行

ア．概要の説明

本校ではマカオへの修学旅行は2012年より実施されている。1999年までポルトガルの植民地であったマカオは、中国大陸のヨーロッパ諸国の植民地の中ではもっとも古く、域内に植民地時代の遺構が数多く点在している。このため、2005年7月15日に、マカオの8つの広場と22の歴史的建造物がマカオ歴史地区という名前でユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された。そういった環境から修学旅行地をマカオに設定している。マカオの現地校との交流を含めて修学旅行の内容を以下のように設定する。

イ．事前学習

子どもたちは修学旅行に行く前の事前学習としてマカオの歴史的遺産についてのテーマを設けて調べ学習を行った。2学級をAアズレージョ、Bマカオ博物館、Cマカオタワー、Dマカオ科学館、Eセントポール寺院、Fモンテの砦、Gセントドミニコ、Hカテドラル、Iセナド広場、Lマカオのいろいろ、に別れて調べ学習がスタートした。本番は11月、9月に調べ学習がスタートし、9月中旬に中間発表会を行った。広州とマカオとの共通点・相違点、マカオとポルトガルとの共通点・相違点の視点にもふれながら、まとめを行っていった。子どもたちから「マカオの歴史的遺産のそばらしさ、歴史の重み、ポルトガルのよさ、マカオで楽しめるポルトガルの文化がよくわかった。実際に行ってみたい、確かめてみたい。」という声が聞かれた。

ウ．6年生の現地体験学習（アズレージョの作成体験）

アズレージョはポルトガル・スペインで生産される、典型的な上薬をかけて焼かれたタイルであり、途絶えることなしに5世紀もの間生産され続け、ポルトガル文化の典型的な要素となった。グループごとにタイルに下絵の作業を行った。ポルトガル人とマカオ人の工芸スタッフによるレクチャーに従って楽しく活動が行われた。特別の上薬を筆につけて丁寧に作業を行うが、なかなかデザインがうまくいかない場面もあった。事前にある程度の自分が作成したいデザインをもとに作業を進めたが多くの子どもたちが最後まで完成することができた。次の日の夕食会場時には焼き上がったアズレージョが紹介され、子どもたちがポルトガル文化を肌で感じ、また達成感・充実感を味わうことができた。

エ．マカオ現地校との交流会

マカオの現地校との交流会を設定した。旅行代理店と協力して相手校を探し、マカオ文化（欧米文化）と日本文化の交流会を意図とした内容を考えた。現地校の小学校は、平和や友情をテーマとしたミュージカルを発表した。本校は、運動会等で学習してきた中国の扇を使ったダンス、日本の扇を使ったダンスを紹介した。現地校は英語を主体とした学校で、様々な国籍の子どもたちが在籍していた。最後はグループごとに日本人学校の児童が扇を使ったダンスを現地校の子どもたちに教える時間を設定し、互いに言葉やジェスチャーを交えて相手に技を伝えることができた。時間がたつにつれて互いの心が通じ合うことができた。

マカオ現地校との記念撮影

オ．セナド広場、セントポール寺院等を巡る世界遺産フィールドワーク

マカオに世界遺産は全部で30箇所あり、そのすべてがマカオ半島内にある。その世界遺産をグループで見学する場所を選択し、セナド広場、最後はセントポール寺院をゴールとするコースを設定してフィールドワークが展開された。事前学習での内容をもとに実際に世界遺産をまわり、肌で異文化を体験することになった。ま

た、グループでコース設定をしたり、時間配分を考えたり、途中で事前に計画した記念撮影のポイントを守ったりと、計画されたものをみんなで協力して活動することができるようになった。5月当初の校外学習での成果、9月の事前学習の成果発表会の成果をもとに、子どもたちがみんなで協力して行動することの力が身についてきたと考える。

③平成26年度　小6西安修学旅行

ア．概要の説明

本校では毎年6年生は修学旅行で国外にいっている。昨年度はマカオであったが、今年度はより中国文化にふれあい、そのよさを味合うという目的のもと、陝西省西安に行くことになった。西安は6月の時期は比較的涼しく、天候的にもよい。また中国の歴史的文化的遺産が多い。世界遺産に指定されている始皇帝の王墓、兵馬俑といったものがある。

イ．6年生の現地体験学習

〈兵馬俑博物館の見学〉

古代中国で死者を埋葬する際に副葬された俑のうち、兵士及び馬をかたどったものである。現在では、陝西省にある秦の始皇帝の陵墓の周辺に埋納された遺跡を指すことが多い。本項では秦の始皇帝陵の一部として1987年、世界遺産（文化遺産）に登録され公開されている。目の前の数千体の兵馬俑を前に子どもたちはそのスケールの大きさや中国文化の偉大さを実感していた。また、その兵馬俑の作成体験も行った。粘土の材料を型に入れて、つなぎ目をきれいになくしていく作業をおこなった。実際に自分たちが作成する体験を行ったことで、より中国の文化のすばらしさを再確認するきっかけとなった。

〈大雁塔〉

大雁塔（だいがんとう）とは、652年に唐の高僧玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典や仏像などを保存するために、高宗に申し出て建立したである。唐の皇帝高宗が立てた仏教寺院である慈恩寺の院内にあります。大雁塔は高さが64メートルもあり、最上階から西安を展望できます。小説「西遊記」の三蔵法師のモデルと言われる玄奘がインドから持ち帰った経典が保存されている。子どもたちはその大きさや歴史の奥深さを実感していた。また、今回6年生で大雁塔の前で長縄を行う体験を行った。これまで学校で練習してきた経験をもとに、中国の歴史的建造物の前で行った長縄は生涯忘れることのない経験となった。

〈城壁のサイクリング体験〉

西安城壁は一周14kmある。ノンストップ時速14kmで走ると1時間かかる計算になる。今回はその一部分の4kmをサイクリングすることになった。城壁の上は意外と広く、四車線の車道ほどの広さがある。人の姿はまばらで、市街の喧騒と比べると、とても閑散としている。そういった場所でのサイクリング体験となった。でこぼこ道が続く中、グループで歩調を合わせながら会話を楽しみ、西安の景色を見ながらサイクリングを楽しんだ。最終日に行ったサイクリングはこれまでの西安の訪問地を振り返り、中国のよさ、日本との違い、ぞれぞれのよさを実感するとてもよい機会となった。

４．全体を通した成果と課題（成果○、課題●）

○国際教育の実現に向けて様々な実践を通してきたが、まずは教職員の基礎的・基本的な資質、教員としての知識、教科教育における目標をしっかり達成させること、コミュニケーション能力を授業で鍛えることが大切となることが再確認できた。

○修学旅行や学校行事において他文化にふれあうことで、自国の日本文化を再確認するだけでなく、相手の国の文化のよさや日本との違いを実感する機会となった。しかし、まずは自国の文化のよさを再確認することが大切であることがわかった。自分を知って初めて相手を知ることができる。

○相手とのコミュニケーションは言葉だけではないことがわかった。身振り・手振り、ジェスチャー、様々な言語、身体表現等を用いて相手とコミュニケーションできることがわかった。

●今後、教科教育における基本的な知識・技能を子どもたちに身につけさせることが大切だと痛感した。それができてはじめて国際教育が実践できると考える。

●交流・体験ありきではいけない。まずは交流・体験に至るまでの見通しを持つことが大切である。事前学習での学び、友だちとの関わり、それが本番の体験活動でどういかされるのか？自分がこれからどのようなゴールに向かって歩んでいるか？という見通しをしっかり持たせることが大切とも実感した。

●本論で述べた様々な活動の場を今後も保障してくれる環境作りも大切と感じた。現地校との交流を今後も続けていくこと。また、交流の仕方・内容もしっかり再検討しなければならない。毎年の反省を生かしながら、来年度はさらによいものを作り上げていく向上心も必要である。また、本当の国際教育とは何か？今自分たちに足りない物は？それらに常に意識しながら、国際教育の実現に向けてこれまでの活動を継承していく必要があると思う。